さらなるにぎわいの創出へ

明石駅周辺の回遊性を高め まちの活性化に向けた整備を

問　明石駅周辺地区のにぎわい創出を、財政負担の少ない方法で取り組めないか。

答　本市は明石駅周辺の回遊性を高めさらなるにぎわいの創出を目的に、ラポール明石からアスピア明石までの歩行者デッキ延伸を検討していたが、接続が困難であることが判明したため、雨よけの設置など１階部分の歩行者空間の整備を検討することとした。

旧市立図書館跡地は、県との協議や市民とのワークショップを経て気軽に使えるフリースペース、全天候型の大屋根広場、多目的ホールなど市民の需要が高い機能を集約し、明石公園での多様な活動を支える交流施設として整備する予定である。

国の補助金は、明石駅周辺のさらなるにぎわい創出のため複数事業の相乗効果による面的整備でのまちづくりで活用できる。コンパクトで効率的な施設として整備し維持管理費用を抑えながら全ての人が行き来しやすい環境を整え、まちの活力を向上させていく。

全ての人が行き来しやすい環境を

寿タクシー利用券の交付

利用状況やニーズを調査し 持続可能な方法を検討

問　物価高騰等による生活費増加により高齢者の移動費や交通費にも影響が出ている。敬老優待乗車証事業である寿タクシー利用券の交付額を増額できないか。

答　本市は、高齢者の社会参加を促進し、社会的交流を通じ生きがいの向上に資することを目的に70歳以上の高齢者に対し、バス共通優待乗車証と寿タクシー利用券を交付している。

寿タクシー利用券の交付額は、コロナ禍での外出支援である特例的措置を終了し、今年度より２千円に戻している。高齢者の増加とともに事業費が増加する中、本事業を維持するため高齢者の外出状況や通院ニーズの地域ごとの特性は把握しつつ、利用実態の分析や他市の取り組みを参考に効果的な外出支援の在り方を検討している。今後は、実態を把握するアンケート調査等で、利用しやすい持続可能な事業となるよう努める。なお、要介護認定を受け公共交通機関での通院が難しい人へは高齢者通院支援タクシー事業を設けている。

増加する中高年の引きこもり

８０５０問題が顕在化 当事者と家族の不安軽減を

問　国の調査では40歳から60歳代の中高年層のひきこもり者数は約61万人である。本市の現状と支援内容を聞く。

答　本市の中高年の引きこもり者数は約１５００人と推計される。ひきこもり期間の長期化に伴い当事者とともに親も高齢化し、生活困窮に陥る８０５０問題等が顕在化し重要な社会問題と考える。本市は、ひきこもり相談センターを設置し精神保健福祉士等の専門職による専門的、継続的な支援を実施している。令和６年度の中高年層の相談者数は60人で相談者全体の３分の１を占める。中高年の場合、長期間のひきこもりによる社会経験不足や社会につながる不安が強い傾向があり、家族は当事者との関わり方に不安を抱えている。当事者会で孤立感の軽減と社会復帰のきっかけづくりとして農業体験等を実施し、共同作業を通じた社会性の回復や自己肯定感の向上を図っている。また、家族に対し当事者への声掛けのこつや関わり方の講座を開催している。

本市のまちづくりの指針

自治基本条例に掲げる参画と協働 対話と共創との関係性は

問　明石市自治基本条例に掲げる参画と協働と、市長の掲げる対話と共創の関係について聞く。

答　本条例は、自治の主体である市民、市議会、市長等の役割や責務を明確にし、市政に関する基本的な事項を定めることで自治の実現を目指す本市のまちづくりの指針となるもので、参画と協働はその基本原則の一つとして条例に定義されている。

対話と共創は、産官学民の多様な市民参画のもと、複雑化、多様化する市民ニーズや地域課題を深堀りし、課題解決を図るために必要な手段であり、参画と協働をより発展させたものである。参画の手段はさまざまだが市民との対話が重要であり、共創は協働を基本としている。対話で明確になった課題を企業や大学、国や県、地域等、産官学民の多様な主体の共創で新たな価値を創造し解決に結び付けたい。

今後も市民との対話や産官学民との共創により、まちづくりを進めていく。

市長の掲げる対話と共創とは

大蔵海岸までコースを延伸

神戸マラソン２０２５ 市の評価と今後の姿は

問　神戸マラソン２０２５は、本市ににぎわいをもたらす有意義な大会であったと感じている。市の評価と今後目指す姿について問う。

答　今大会は、約２万人のランナーが大蔵海岸を折り返して走り抜け、明石海峡や大蔵海岸の魅力を存分に感じてもらえたと考える。ルートを変更し本市として初めてのマラソン大会であり、ランナーが安心して走れ、応援等の来場者を安全安心に迎えるため安全面を最優先した万全の警備体制を整え、事故なく大会を終えることができた。また、当日は神戸マラソンとして初の参加型イベントを本市で実施し、未就学児と保護者のペアがミニマラソンに挑戦した。大蔵海岸公園内を走り抜けた後、神戸マラソンのランナーを応援し、こどもを核としたまちづくりに取り組む本市らしい盛り上がりになったと考える。

今後、今大会の運営状況等を検証し来年度以降も安全な大会運営を大前提に、にぎわいと大蔵海岸の活性化に向けさまざまな方策を検討していく。

明石市域を駆け抜けるランナーたち

子どもと若者のＳＯＳ

ゲートキーパーやＬＩＮＥ相談で 早めにキャッチし丁寧な対応を

問　若者の自殺を防ぐ取り組みについて聞く。

答　本市は、専門職を配置し相談窓口の充実を図るとともにゲートキーパー養成講座等を実施してきたが30歳代以下の自殺者数は減っていない。そのような中、子どもと大人それぞれに向けたチラシを作成し、子どもはＳＯＳを出せるよう、大人はそれを受け止められるよう啓発に努めている。また、子どもに対してはインターネット連動型広告を活用した相談窓口の周知、若者にはＬＩＮＥで相談できる体制を整え、相談者の状況に応じて医療機関や生活支援サービスにつなぐ丁寧な関わりに努めている。

ゲートキーパーの養成については、令和６年度から不登校支援担当教員やスクールソーシャルワーカー等を対象に周知・啓発している。７年度からは子ども対象のゲートキーパー養成講座を実施しており、多様な形で研修が開催できるよう工夫し、一人でも多くの児童生徒へ働き掛けができるよう努めていく。